青森県立美術館

コレクション展

AOMORI MUSEUM OF ART COLLECTION

2020-4

※所蔵先の記載が無い作品はすべて青森県立美術館所蔵です。
※作品サイズの単位はcmで、原則として縦×横（立体は、高さ×横×奥行）の順序で表記しています。
※出品作品は都合により変更される場合があります。

通年展示

アレコホール

マルク・シャガール　Marc CHAGALL

1	バレエ「アレコ」の背景画	1942年	テンペラ・綿布		
	第1幕　月光のアレコとゼンフィラ			887.8×1472.5	
	第2幕　カーニヴァル			883.5×1452.0	
	第3幕　ある夏の午後の麦畑			914.4×1524.0	＊1
	第4幕　サンクトペテルブルクの幻想			891.5×1472.5	

F，G

奈良美智　NARA Yoshitomo

1	アオモリ・ヒュッテ 1	2016年			＊2
2	Three Sisters Billboard / Aomori Version	2006年	アクリル絵具・紙、板	137.8×257.4	＊3
3	般若猫	1989年	アクリル絵具・キャンバス	60.0×100.0	
4	積木がくずれる夜、大粒の涙	1989年	水彩・紙	20.5×14.5	
5	中国天安門	1989年	水彩・紙	20.5×14.5	
6	家	1989年	水彩、コラージュ・紙	20.5×14.5	
7	Untitled	1989年	色鉛筆、マーカー・紙	20.5×14.5	
8	Untitled	1989年	水彩・紙	20.5×14.5	
9	首のない馬はNo. 5	1989年	ミクストメディア	20.5×14.5	
10	1, 2, 3, 4! It's everything! / Aomori Version	2008年	アクリル絵具・板	267.9×252.2	＊3
11	Puff Marshie	2006年	FRP、ウレタン塗装	H150.0×Φ300.0	＊3
12	Last Right	1994年	アクリル絵具・キャンバス	100.0×100.0	
13	Lampflowers	1993年	アクリル絵具・キャンバス	150.0×200.0	
14	White Riot	1995年	アクリル絵具・キャンバス	100.0×120.0	
15	「トビウ・キッズ」シリーズより　《シウ》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	＊3
16	「トビウ・キッズ」シリーズより　《ユノア》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	＊3
17	「トビウ・キッズ」シリーズより　《コウ》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	＊3
18	「トビウ・キッズ」シリーズより　《ココネ》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	＊3
19	「トビウ・キッズ」シリーズより　《レノア》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	＊3
20	アオモリ・ヒュッテ　2	2016年			＊2
21	Broken Heart Bench / Aomori Version	2008年	アクリル絵具・板	180.0×161.5	＊3
22	飛生	2017年	アクリル絵具、色鉛筆・紙	16.8×20.0×7.0	＊3
23	北のまほろばを行く：　オープニング	2019年	アクリル絵具、色鉛筆・紙	29.7×42.0	＊3
24	北のまほろばを行く：　満月のよる	2019年	アクリル絵具、色鉛筆・紙	29.7×42.0	＊3
25	北のまほろばを行く：　島の上	2019年	アクリル絵具、色鉛筆・紙	29.7×42.0	＊3
26	北のまほろばを行く：　三姉妹	2019年	アクリル絵具、色鉛筆・紙	29.7×42.0	＊3
27	北のまほろばを行く：　カノン	2019年	アクリル絵具、色鉛筆・紙	29.7×42.0	＊3
28	北のまほろばを行く：　千島列島	2019年	アクリル絵具、色鉛筆・紙	29.7×42.0	＊3
29	Untitled	2008年	アクリル絵具・板	58.5×109.0	＊3
30	Tobiu 2017	2017－20年	ブロンズ	37.0×27.0×25.5	＊3
31	HULA HULA GARDEN	1994年	ミクストメディア	可変	

屋外展示

奈良美智　NARA Yoshitomo

1	あおもり犬	2005年	鉄筋コンクリート、GRCモルタル、フッ素樹脂塗装	850.0×670.0×900.0	
2	Miss Forest / 森の子	2016年	ブロンズ、ウレタン塗装	635.0×227.0×227.0	＊4

＊1 フィラデルフィア美術館蔵　※展示期間：2017年4月25日－2021年3月頃（予定）

＊2「アオモリ・ヒュッテ」は、この展示室に「ニュー・ソウルハウス」として、2006年から2015年まで設置されていた小屋の作品を、2016年3月に改築したものです。

＊3 作家蔵(青森県立美術館寄託)

＊4 美術館南側(カフェ、ショップ側)の屋外敷地に位置する奈良美智のデザインに基づいた小さな八角形の建物[八角堂]の中に展示しています。

青森県立美術館コレクション展 2020-4：危機の中の芸術家たち

会期：2020年11月28日（土）― 2021年2月23日（火・祝）

人間活動に起因するとも言われる地球規模での気候変動、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大、Black Lives Matter運動。2020年は様々な角度から人の生存や社会における自由の危機について考えさせられた年です。そうした、いわば「危機の時代」における芸術の役割を知るべく、今年度最後のコレクション展は「危機の中の芸術家たち」と題して行います。今年で没後30年となる工藤哲巳の展示を中心に、同時期開催の企画展「阿部合成」関連として弟子にあたる小坂圭二や成田亨らの作品を紹介。全体をとおして、芸術家たちの想像力や批判精神を手がかりに、私たちが「危機」を基点に、これからの時代を生き延びるための感性を養う展覧会として開催します。

「**今和次郎、純三：フィールドワークの小径**」では、今和次郎と今純三を紹介します。生活を独自の眼差しで切りとり、採集分析する「考現学」の創始者として知られる兄・和次郎と、関東大震災を機に帰郷し、青森の初期版画文化の立役者である画家／版画家の弟・純三。震災以降の和次郎の東北地方の飢饉に備えた貯穀倉庫「郷倉」の調査設計、被災者や生活弱者の生活支援活動「セツルメント」への関わりと、純三による、かつて黒石市に存在した「黒石劇場」舞台背景画制作をはじめとする仕事は、相互に呼応する部分があるように見えます。本章では上記に関連する作品や記録写真を紹介し、当時震災という危機に発する二人のフィールドワーク(=仕事)を手がかりに、今日の公共性と芸術の関係について考えます。「**棟方志功：信念の裸婦**」は、棟方が手がけた蔵書票や文学作品への挿絵から始まります。同時代の表現者たちとの仕事を通じて自身の表現を深めた棟方の作品には、自己の解体と再構築の軌跡が絶え間なく現れ、そんな棟方の「修行」は、東北の飢饉という生存の危機に行き当たり、転じて大らかな裸婦像が見出され、やがて「広大無辺」な仏の世界に至ろうとする大作《東北経鬼門譜》が生まれます。本章では棟方作品をもとに、芸術家が見出した危機をいかにして制作につなげていくかを紹介します。「**小坂圭二：重力／傷／恩寵**」では、小坂圭二の彫刻作品を紹介します。その彫刻には幾何学的な構成に具象的な要素が交わることで、真空状態とも言うべき空間の訪れが促されているように見えます。形象化のカギは「重さ」。自身が夢見た神と人との調和した天上世界は、そのブロンズ彫刻が孕む「重力」という下降の力でもって現実化の道がひらかれていきます。そうして調和と混沌が併存する作品においては、彫刻の問題として己と世界の「傷」を引き受け他者にひらくこと、およびそうした先に真空ならぬ恩寵空間の訪れが待望されていると言えそうです。こうした小坂の仕事は、小坂とほぼ時代を同じくするフランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユの、キリスト教神学に根ざした「世界への愛」と通じるものがあるように思えてなりません。「**成田亨：彫刻と怪獣の間で**」では、彫刻家／特撮美術監督の成田亨のウルトラ怪獣原画や鬼を象った巨大な彫刻作品などを紹介し、彫刻作品と怪獣デザインの間で、芸術家としての信念を形にしようとする成田の仕事をご覧いただきます。なお小坂、成田両氏の作品制作においては、師である阿部合成の、戦争に発する苦悩と闘争の先に独自の画境を求める軌跡が、様々に影響を与えているようにみえるのが興味深いところです。「**澤田教一：空想のゲリラ**」では、ベトナム戦争の戦火を逃れて川を渡る一家をうつした写真《安全への逃避》で知られるカメラマン・澤田教一を紹介します。その写真には澤田の、加害者と被害者どちらにも共感できてしまう複雑な立ち位置が埋め込まれています。青森における三沢基地という日本の中のアメリカを横目に、UPI通信社の派遣でベトナムに赴く澤田。彼が戦場で目にしたのは命と故郷を奪い・奪われあう人々の姿でした。戦場への愛憎半ばするような、複雑な感情を滲ませた写真からは、澤田自身が故郷と世界の危機をさまよう一人のゲリラ兵だったと言うことができそうです。そんな危機は澤田個人に留まらず、例えば現在の日本に内在する「帰還困難区域」を考え合わせる時、写真にうつる人々は反転し、私たちの姿として再浮上します。そこで私たちは自身が拠って立つ複雑な存在構造それ自体を自覚し、厳しく問う姿勢をもたなければならない。その意味で澤田の写真には東北の「飢餓の詩人」黒田喜夫が詩「空想のゲリラ」に幻視した非在の村落共同体を接続することもまた可能でしょう。いまも、故郷と世界の危機に拮抗し得る想像力の訪れが待たれているのです。「**工藤哲巳：わたしたちの肖像**」では工藤哲巳について、その初期から渡仏後の人間中心主義を批判する「社会評論の模型」作品群、晩年の郷土に根ざした作品までを二つの展示室で紹介します。1960年代「反芸術」の旗手として知られ、芸術の占める領域を原子物理学や集合論を手がかりに拡張することから始まった彼の仕事は、その初期から、従来の人間観や文明観を治療するような余地を孕んでいました。しばしば作品のモチーフとなる、人工世界で放射能に養殖され、委縮と膨張を繰り返す男根(「あなたの肖像」)は、私たちが技術と自然のもつれた環の中から、この現実を生き延びるためのエコロジカルな倫理と形式、すなわち、これからの「わたしたちの肖像」を示してくれているかのようです(*1)。生きてるだけで丸もうけ。嗚呼、貧しくも荘厳なれ、私たちの灯台よ!

“今、何が始まって終わろうとしているのか。それを考え、積み重ねていく不断のプロセスが世界の明日を つくると信じること。芸術であろうとなかろうと。それが良かろうと悪かろうと。”

上記は今夏「コレクション展2020−2：この世界と私のあいだ」作品リストに掲載した、筆者のエッセイの結びです。今にしてみれば、なんて第三者的でノンビリした態度でしょう。この文章を書いている10月19日現在、周囲でもコロナウイルス感染の規模が増大する中、善し悪しによらないウイルスの存在や振る舞いは、人間などより影響力ある制作の担い手に思える。そんな現状に対峙する中で、制作や芸術には在り方の再検討を求めずにはいられません。それは美術館においても同様です。作品の芸術としての質を担保し、コレクションをもとに過去と未来をつなぐための美術館（S.ギーディオン『永遠の現在』等参照)。今日の状況下においてその場所には、社会の内側から芸術を保持するとともに、その外側に偏在する生を呼び込む余地をも含んでおく必要があります。具体的には美術館に「郷倉」を接ぎ木する。その時コレクションは時代を超え、全ての生あるものを養う「なま」の表現として私たちの眼前に回帰し続けることになる。
上記について別角度、工藤哲巳の作品構造を糸口に考えを展開してみましょう。工藤の「社会評論の模型」は今年その位相を完全に反転させ、世界の現実そのものとなりました。比喩でなく酸性物質その他を含む雨を待ち、ウイルスにまみれた空気を吸い、マイクロプラスチックを取り込み生きる私たちは、どうすればこの現実を再反転させ、未来を制作し得るかを検討する必要があります。その時美術館には、コレクションを養分に過去を未来に輪廻（リサイクル）させ、私たちが他者と共に変容するための修練の場、思考や行為を耕す畑としての役割を求めたい。危機の中を生きる芸術家／私たちは、今ここにある作品を基点に芸術／制作を始めなおさなくてはならない。
今回のコレクション展は大体こうしたことを志向して構成されていますが、実証を続けるには私自身、大いに現状に振り回されていることを最後に告白しなければなりません。私は混乱し、この危機に対する正しい恐れ方も分からずにいる。しかし今は未来の美術館への予感を携えつつも錯乱したままに筆を置き、ひとまず毎日の仕事に注力したいと思います。そうすることが、少なくとも今の「自然」と思える。明日は少し早めに出勤しようと思っています。朝一で展示室の開場当番がありますので。

2020 年、青森　奥脇嵩大 (青森県立美術館学芸員)

*1 現在デンマークのルイジアナ近代美術館では「TETSUMI KUDO: CULTIVATION」という工藤哲巳の個展が開催中であり、そこで工藤作品は「人間と技術と、汚染された自然を養分に育つ生命に対する探求」として位置づけられ、展覧会は「エコロジカルな実験室」となるよう構成されているようだ。その参照軸の一つには、今日のウイルスをはじめとする「人間ならざるもの（ノンヒューマン）」との共存を主題とする近年のエコロジー論の潮流があり、一部で人間活動が地球規模での環境変動に影響を与える地質年代を示す「人新世」の時代とも言われる今日において、工藤哲巳の仕事は、その存在感をいよいよ強めている。加えて文明への批判意識の系譜の源流には、拠って立つ時代としての近世における思想や制度を徹底して批判し、人間が生きものらしく生きていくことのできる社会(自然世)を希求した八戸ゆかりの思想家／医師である安藤昌益(1703-62)の影を指摘することは、あながち間違いではないように思われる。

環境汚染―養殖―新しいエコロジー

自然の汚染！人間(ヒューマニズム)の分解！
世界の終り！
あなたは、お芝居における悲劇俳優のように大げさに言う。これらの叫びは、昨今の流行語である。
しかし状況は全く破滅的でなければ、一時的なもの（流行語）でもない。
現在とは、我々が自らを作り直すためには避けられない過程であり、そして多くの苦行をもたらす。
この状況下において、我々自身のための変革の偉大な可能性があると言える。
第一に、そこには我々の概念の変革がある。いわば、我々の概念における原始的な二元論(対照の概念)の自己崩壊がある。

原始的な二元論=人間対自然、人間対動物、人間対機械(道具)など。そのなかでの「人間の特権」。
おそらくこの基本的な概念(原始的な二元論)は、キリスト教信仰から生まれた。
我々の歴史においてこの二元論は、複雑で興味深い「網の目」(ネット)を作り出してきた。
たとえば奴隷制や植民地主義、ブルジョアジーと労働者との関係、ナショナリズム(人種主義)、独占事業、資本主義、戦争などなど。
しかし今、この「網の目」は壊れ、(脱皮)に変質しつつある。

この基本的な関係、言い換えれば、人間対自然、人間対道具の関係、それ自体が変質の過程にある。
たとえば歴史的に見ても、奴隷制は廃止され、あるいはブルジョアジーと労働者との関係性も変わってきたように、今日の我々の概念もまた、変質を受ける最中にある。

「征服された自然」は、人間に復讐を開始する。人間の利己主義のために、彼らによって製造された汚染物質や道具(機械)を使うことで。そして、それらは今、人間を分解し始めている。
この状況は人々を大混乱に陥れている。
しかし私はこの状況のなかに、我々の変革の希望と可能性を見出している。これは逆説だろうか？それともアルコール中毒者によって述べられた仮説だろうか？
いずれにせよ、汚染された自然とエレクトロニクス(道具)の増殖、人間(ヒューマニズム)の分解、古い因習的な価値体系とを相関関係において思考することは重要である。
これらは、腐敗しながら相互に浸透しあっている。(人間対自然、人間対機械、テクノロジーなど)。
そして我々の社会や世界に、全く新しいエコロジーを作り出すようになる。「支配」の概念(原始的な二元論)は分解や浸透作用によって互いに破壊され、相互のコントロール、相互文化の時代が開き始めるだろう。

人間は自然によってコントロールされ、自然は人間によって養殖され、エレクトロニクスは人間をコントロールし、養殖する。人間はエレクトロニクスをコントロールし、それを増殖させる。また自然はエレクトロニクスを包含する。

この新しい生態系のなかで、人間の尊厳のみが王様のように尊大のままでいられるはずがない。

しかし、ヒューマニストを自認する人間の脳味噌から、特権的意識(人間の尊厳)や植民地主義的感情を取り除くことは、非常に難しい。
そのために真の、そして根源的な人間の変革が必要なのだ！
おそらく本能を、つまり遺伝子細胞や脳細胞を、彼らの身体に放射能を当てる放射線治療によって作り直さなくてはならない。
彼らの保守的で利己主義的な脳味噌を矯正するために。

これはあなた方に「ファシズム」を思い起こさせるかもしれない。放射能によって人間の身体を治療するというイメージは。

しかし新しいエコロジーでは、それこそが「特権的意識」や「ファシズム」を去勢するのに役立つのだ。
今、何が必要なのか？
新しい生態系における我々の協同作業のために、
諸概念の変革のために、そして新しいエコロジーでの我々自身の真の知識のためには？

新しい世代、いわば若い作家や学生たちといった人々の直観的な仮説を採用する必要性がある、と私は考える。私は今、汚染された自然や分解する人間の泥沼のなかに新しいエコロジーの発展を予言する。
今日、あなた方に、我々の新しいエコロジーの小さなモデルを提供する。

1971年、パリ　工藤哲巳

本ページの文章は、個展「環境汚染―養殖―新しいエコロジー―あなたの肖像」(1972年／アムステルダム市立美術館、オランダ)カタログ収録の文章（仏語）を、「あなたの肖像―工藤哲巳回顧展」(2013−14年／国立国際美術館、東京国立近代美術館、青森県立美術館)カタログのために和訳し、その232頁に掲載されたものを、訳者である桝田倫広氏(東京国立近代美術館)の許諾を得て再掲したものである。再掲にあたって適宜改行を施している。71年当時の工藤の作品ステートメントが半世紀経った今日においても「予言」として機能し続けている側面に慄然とするとともに、現状から「新しいエコロジー」という言葉で人間が存在するための新しい倫理と形式を探ろうとする工藤の態度は、私たちが今、この危機の時代の中で携えておくべきものと考え、ここに再掲した次第である。ご快諾くださった桝田氏に感謝申しあげたい。（奥脇）

N

今和次郎、純三：フィールドワークの小径 ― 関東大震災前後の民家や劇場をめぐる実践から

KON Wajiro and Junzo: Passage of fieldwork around Great Kanto Earthquake

今和次郎　KON Wajiro

1	東北地方の郷倉やバラック装飾社、セツルメント関係の記録写真	1920－30年代	本展のためにデータ出力(原資料は全て工学院大学図書館今和次郎コレクション蔵)

今純三　KON Junzo

1	大震災風景（バラック小屋）	1923年	銅版・紙	12.0×18.0
2	乞食　合浦公園	1931年	エッチング・紙	10.2×28.6
3	雪景色	1935年	エッチング・紙	13.0×19.9
4	市日	1936年	銅版・紙	24.1×34.2
5	（七）吉原仲之町	1937年頃	水彩、鉛筆・紙	13.3×36.3
6	（八）宮	1937年頃	水彩、鉛筆・紙	13.3×36.7
7	（九）町家	1937年頃	水彩、鉛筆・紙	13.3×36.3
8	（十）野原	1937年頃	水彩、鉛筆・紙	13.3×36.3
9	（十一）庭	1937年頃	水彩、鉛筆・紙	13.3×36.4
10	（十二）公園	1937年頃	水彩、鉛筆・紙	13.4×36.3
11	（十三）洋室	1937年頃	水彩、鉛筆・紙	13.3×36.3

棟方志功展示室

棟方志功：信念の裸婦

MUNAKATA Shiko: Nude Women of Munakata's Beliefs

1	「シラノ」劇版画	1931年	多色木版・紙	各18.0×11.8	
2	歌舞伎版画勧進帳	1931年	多色木版・紙	各13.5×9.0	
3	『児童文学』第2集(復刻)	1932年初版／1984年復刻	アリス館　発行		＊5
4	『エミリアンの旅』(復刻)	1933年初版／1971年復刻	ほるぷ出版　発行		＊5
5	蔵書票	不明	木版、彩色・紙	7.0 ～ 14.0×6.0 ～ 9.5	
6	桃真盛（ももまっさか）り	1933年	多色木版・紙	各16.8×23.1	
7	『版藝術』第12号	1933年	白と黒社　発行		
8	ヴェニュス生誕	1934年	コロタイプ、彩色・紙	各21.0×15.5	＊5
9	華厳（けごん）譜（ふ）	1936年	木版・紙	各30.0×39.0	＊5
10	遺憾なことにの柵	1944年	木版、彩色・紙	26.0×17.0	＊5
11	夢応（むおう）の鯉魚（りぎょ）	1940年	木版・紙	各31.8×31.8	＊5
12	般若心経版画柵	1941年	木版・紙	各25.0×35.0	＊5
13	東北経鬼門譜（とうほくきょうきもんふ）	1937年	木版・紙	122.5×984.0	＊5

＊5 棟方志功記念館蔵

O

小坂圭二：重力／傷／恩寵

KOSAKA Keiji: Gravity,Wound and Grace

1	世界の破れを担うキリスト	1969年	ブロンズ	75.0（高さ）
2	ガダルカナルの落日	1979年	ブロンズ	150.0×60.0×40.0

J

澤田教一：空想のゲリラ

SAWADA Kyoichi: Imaginary Guerrilla

※この章のみ制作年は撮影年

1	《仮橋を渡る人々》｜青森県上北地域	1955－61年	デジタル銀塩プリント・タイプC	40.2×27.0
2	米軍三沢基地内	1955－61年	デジタル銀塩プリント・タイプC	27.0×41.0
3	恐山｜青森県むつ市	1964年7月22－23日	ゼラチンシルバープリント	20.5×30.4
4	恐山｜青森県むつ市	1964年7月22－23日	ゼラチンシルバープリント	20.5×30.5
5	天ヶ森｜青森県三沢市	1964年7月24日	ゼラチンシルバープリント	23.6×35.4
6	南ベトナム	1965－68年	ゼラチンシルバープリント	23.7×35.4
7	チュライ, クアンナム省	1965年8月20日	ゼラチンシルバープリント	40.6×28.8
8	ロクチュアン, ビンディン省	1965年9月6日	ゼラチンシルバープリント	43.8×31.9
9	プレイメ, ザライ省	1965年10月22日	ゼラチンシルバープリント	40.6×27.3
10	《安全への逃避》｜ロクチュアン, ビンディン省	1965年9月6日	ゼラチンシルバープリント	42.7×58.5
11	《敵を連れて》｜ボンソン北方, ビンディン省	1966年1月29日	ゼラチンシルバープリント	58.8×42.8
12	非武装地帯から2km南	1966年9月2日	ゼラチンシルバープリント	35.4×23.7
13	非武装地帯南方	1966年9月21日	ゼラチンシルバープリント	40.6×27.2
14	非武装地帯	1967年5月19日	ゼラチンシルバープリント	35.3×23.7
15	ダナンの南16㎞	1967年10月25日	ゼラチンシルバープリント	27.3×40.6
16	南ベトナム	1966年頃	ゼラチンシルバープリント	26.2×38.9
17	フエ	1968年2月11日	ゼラチンシルバープリント	32.0×40.6
18	フエ	1968年2月15日	ゼラチンシルバープリント	32.0×40.6
19	コンポンスプー	1970年6月	ゼラチンシルバープリント	23.7×35.5
20	タンコク	1970年10月12日	ゼラチンシルバープリント	35.4×23.7

K

成田亨：彫刻と怪獣の間で

NARITA Tohl: Between Monster design and Sculpture

1	鬼モニュメント　酒呑童子	1990年	FRP	300.0×230.0×183.0	＊6
2	鬼モニュメント　茨城童子	1990年	FRP	243.0×260.0×173.0	＊6
3	鬼モニュメント　星熊童子	1990年	FRP	210.0×105.0×122.0	＊6

4	鬼幻影　地獄の鬼	1994年	FRP	291.0×136.0×42.0	＊6
5	鬼幻影　阿修羅	1994年	FRP	291.0×108.0×60.0	＊6
6	鬼幻影　般若	1994年	FRP	195.0×153.0×20.0	＊6
7	鬼幻影　大江山	1994年	FRP	110.0×146.0×20.0	＊6
8	鬼幻影　夜叉・羅刹	1994年	FRP	319.0×163.0×38.0	＊6
9	鬼幻影　風神・雷神	1994年	FRP	328.0×176.0×46.0	＊6
10	鬼幻影　蝦夷	1994年	FRP	110.0×145.5×17.0	＊6
11	翼をもった人間の化石	1971年	FRP	190.0×160.0×120.0	＊6
12	ウルトラセブン決定稿B案	1967年	ペン、水彩・紙	39.4×35.0	
13	ウルトラセブン初稿	1967年	ペン、水彩・紙	44.5×37.5	
14	ウルトラマンイラスト	1983年	ペン、水彩・紙	36.5×25.7	
15	ウルトラマン初稿	1966年	ペン、水彩・紙	35.7×24.5	
16	ゼットンイラスト	1983年	ペン、水彩・紙	36.6×25.4	
17	ゼットンイラスト	1983年	ペン、水彩・紙	36.6×25.4	
18	ゾフィーイラスト	1983年	ペン、水彩・紙	36.5×25.5	
19	ダダAイラスト	1983年	ペン、水彩・紙	38.0×26.8	
20	ダダBイラスト	1983年	ペン、水彩・紙	38.0×26.9	
21	ダダCイラスト	1983年	ペン、水彩・紙	38.0×26.9	
22	にせウルトラマン	1966年	ペン、水彩・紙	36.7×26.0	
23	パラージ「ノアの神」神殿セット	1966年	ペン、水彩・紙	23.7×39.3	
24	プラチク星人	1968年	鉛筆、水彩・紙	36.5×33.3	
25	ポール星人	1968年	鉛筆・紙	39.4×36.4	
26	ミクラス	1967年	ペン、水彩・紙	46.0×36.5	
27	科学特捜隊基地	1966年	ペン、水彩・紙	31.0×40.7	

＊6 個人蔵

Ⅰ - Ⅱ

工藤哲巳：わたしたちの肖像

KUDO Tetsumi: Our Portrait

Ⅰ

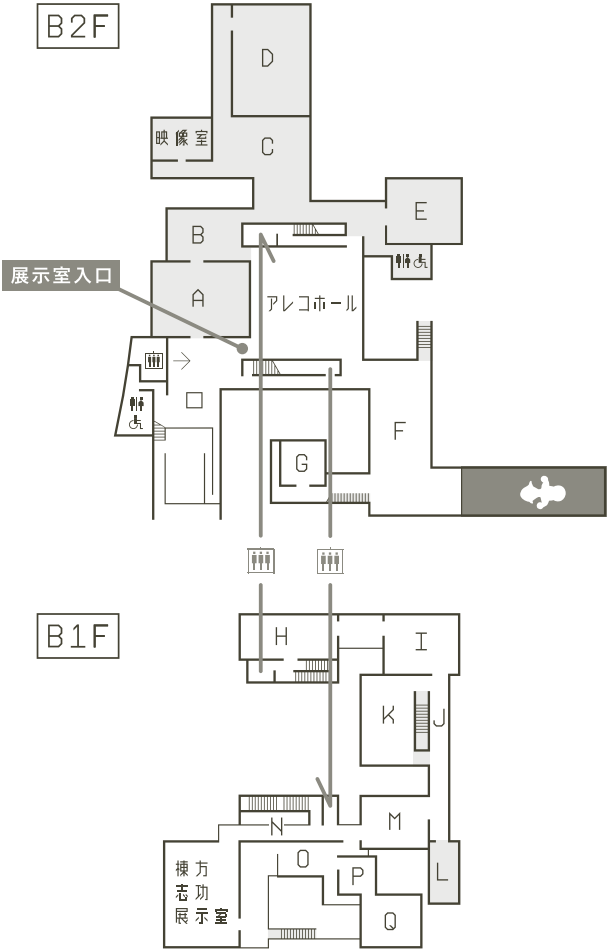
1	増殖性連鎖反応−1	1959年	油彩・キャンバス	119.4×59.2	
2	インポ哲学	1960−61年	木、プラスチックのボウル、ポリエステル、電球、毛髪、縄、絵具、布、シリンダー（不織布）、接着剤	110.0×540.0×90.0 / 200.0×200.0×17.5	
3	黒メカから白メカへ、それから…	1961年	紐、パトローネ、合成樹脂、合板、他	121.2×91.3×28.0	
4	モルモット関係	1962年	彩色された木箱、プラスチックのボウル、瓶、ビニール製人形、注射器、バイアル瓶、温度計、水、真空管、ビニールチューブ	55.0×55.0×16.0	
5	あなたは変態しつつある-D	1964年	彩色された木箱、ポリエステル、樹脂、タバコ、ラジオ、バッテリー	30.0×30.0×30.0	
6	あなたの肖像	1964年	ビーチチェア、綿、プラスチック、ポリエステル、電子回路図、樹脂、水着、雑誌、接着剤	120.0×80.0×150.0	
7	あなたの肖像'67	1967年	乳母車、傘、綿、プラスチック、ポリエステル、樹脂、接着剤、鎖、チューブ、絵具	125.0×180.0×70.0	
8	あなたの肖像 1970-1974	1970−74年	水槽、人工土、綿、プラスチック、ポリエステル、樹脂、人工植物、ルアー、おもちゃのヒトデ、トランジスター、温度計、毛髪、接着剤、絵具	48.0×23.0×26.0	
9	「脱皮」の記念品	1967−68年	鳥籠、綿、プラスチック、他	27.6×35.2×19.6	
10	養殖・郷愁病用・あなたの居間に	1967−68年	鳥籠、綿、プラスチック、ポリエステル、造花、真空管、鎖、人工土	44.0×59.0×32.0	
11	「脱皮」の記念品・郷愁病用・あなたの居間に	1968−69年	鳥籠、合成樹脂、毛髪	32.0×38.0×23.5	
12	脱皮の記念碑	1969年	石膏、合板	119.0×100.0×11.0	

Ⅱ

1	放射能による養殖	1967−68年	彩色された木、プレキシグラス、グロメット、綿、プラスチック、ポリエステル、トランジスター、人工芝	180.0×200.0×50.0	
2	養殖	1968年	造花、植木鉢、綿、プラスチック、ポリエステル、合成樹脂、人工土、人工毛髪、真空管	57.0×14.5×14.5	
3	電子回路の中における放射能による養殖	1970年	プラスチックのボウル、木、綿、プラスチック、ポリエステル、人工毛髪、電子回路図、人工土、おもちゃの鼠、トランジスター、絵具	25.0×Φ48.0	
4	自然による養殖とそれを見ている人々	1970年	プラスチックのボウル、綿、プラスチック、ポリエステル、人工植物、人工土、真空管、毛髪、おもちゃのヘビ、絵具	30.0×Φ26.0	
5	環境汚染−養殖−新しいエコロジー	1971年	木、人工土、プラスチック	51.0×80.0×26.0	
6	カゴの中のカゴの中のカゴ	1976年	鳥籠、綿、プラスチック、ポリエステル、絵具	16.5×23.0×21.0	
7	芸術家の肖像。パリの仏陀	1976年	鳥籠、人工土、綿、プラスチック、ポリエステル、樹脂、造花、糸、接着剤	35.0×41.0×18.0	
8	危機の中の芸術家の肖像	1978年	鳥籠、綿、プラスチック、ポリエステル、樹脂、毛糸、編み棒、おもちゃの鳥、硬貨、錠剤、毛髪、接着剤	29.0×45.0×20.0	
9	遺伝染色体による無限の綾取り	1979年	鳥籠、糸、木、プラスチック、他	32.0×33.0×21.0	
10	未来と過去とのエンドレステープの間での瞑想	1979年	鳥籠、録音テープ、糸	32.5×38.0×22.0	
11	人生のドップラー効果 透明ブルーの輪になる可能性は一億分の一の確率	1983年	木、糸、接着剤	48.0×22.0×10.0	
12	縄文の精子の生き残り	1986年	糸、コード、接着剤	51.0×40.0	
13	前衛芸術家の魂	1986年	傘、頭蓋骨、綿、プラスチック、ポリエステル、樹脂、糸、接着剤	240.0×109.0×109.0	
14	少年期の作品（針に糸を通す女性）	不詳	クレヨン・紙	24.0×19.0	
15	少年期の作品（人物）	不詳	鉛筆・紙	21.0×13.5	
16	少年期の作品（人物（女性））	不詳	ペン・紙	16.0×21.0	
17	少年期の作品（人物（女性））	不詳	鉛筆・紙	21.0×15.0	
18	少年期の作品（人物（学習中のような男））	不詳	水彩・紙	37.5×29.0	
19	少年期の作品（西住戦車隊）	不詳	クレヨン・紙	27.3×37.2	
20	少年期の作品（神社参拝）	不詳	クレヨン・紙	18.0×25.0	
21	少年期の作品（三つのリンゴ）	不詳(1943年頃か)	クレヨン・紙	20.0×25.5	
22	少年期の作品（椰子の木影の月）	不詳	水彩・紙	21.5×15.0	
23	工藤哲巳　1981年8月20日 草月ギャラリー個展、東京	1981/2002年	ゼラチンシルバープリント	35.6×27.5	＊7
24	工藤哲巳　1984年2月27日 岡崎球子画廊にてパフォーマンス、東京	1984/2002年	ゼラチンシルバープリント	35.6×27.6	＊7
25	工藤哲巳　1984年2月27日 岡崎球子画廊にてパフォーマンス、東京	1984/2002年	ゼラチンシルバープリント	35.6×27.7	＊7
26	工藤哲巳　1984年4月14日 河合塾にてパフォーマンス、名古屋	1984/2002年	ゼラチンシルバープリント	35.6×27.8	＊7
27	工藤哲巳　1984年4月14日 河合塾にてパフォーマンス、名古屋	1984/2002年	ゼラチンシルバープリント	35.6×27.9	＊7

＊7 安齊重男 撮影による

展示室マップ



通年展示

アレコホール	マルク・シャガール	Marc CHAGALL
展示室 F,G	奈良美智	NARA Yoshitomo

[青森県立美術館サポートシップ倶楽部共催展]

展示室 P,Q	多田友充	TADA Tomomitsu

コレクション展2020-4：危機の中の芸術家たち

COLLECTION 2020-4：ARTISTS IN THE CRISIS

展示室 N	今和次郎、純三	KON Wajiro and Junzo
棟方志功展示室	棟方志功	MUNAKATA Shiko
展示室 O	小坂圭二	KOSAKA Keiji
展示室 J	澤田教一	SAWADA Kyoichi
展示室 K	成田　亨	NARITA Tohl
展示室 I,H	工藤哲巳	KUDO Tetsumi